

秘拳・三年殺し

大津 隆文

世論調査によれば菅内閣の評価は最近低迷しているが、発足直後は祝賀ムードが広がっていた。そんな中で昨年十一月には菅首相が空手九段を授与されたとのニュースがあった。首相は大学時代空手部に所属した有段者とのことである。

実は私も同じ頃八段の認定証をもらった。ただし内実は首相とは大違いである。まず授与してくれたのが首相は権威ある全日本空手道連盟であるが、私の場合は大学の空手部OB会だ。そもそも実力も黒帯には届かない白帯で終わっている。その私が八段に認定されたのは、永年OB会に所属しささやかな寄付の求めに随時応じたためと思われ、自慢できるものではない。

空手部に入ったのは、正しいと思ったことを貫くためには、自分自身が肉体的にも強くなければいけないとの幼い思いからだ。が、勉強と部活動を両立させる自信がなくなり、結局二年で退部してしまった。意気込みは高かったが結果は尻切れトンボだった。

空手部の師範は奥義を究めたという印象の古老だった。「空手に先手なし」で、軽々に使うてはならないと厳しく教えられた。ある日師範から達人になると三年殺し、五年殺しという秘技を会得すると聞いた。その時のダメージは大したことがないようにみえても、後年になって死に至らしめる技とのことだ。禁じ手ではあるが、実際に使ったのではないかと噂された事件もあったという。

三年殺しの秘拳は夢のまた夢で終わったが、世の中には似たような事例がありそうな気がする。私達が気付かない間に事態が進行して、気付いた時には手遅れになっているケースだ。政策は真綿で首を締めるように、大騒ぎされることなく実施するのが上策とも聞いた。

思い浮かぶのは国債の大量発行と残高累積である。予算がいずれ回らなくなる、インフレになる、後の世代の負担が大変だ、等々問題点が指摘されてきたが、破局は訪れることなく世の中は平穩に過ぎている。本当にこのままで行けるのだろうか、心配性のせいか私は心配でならない。